

博士論文審査結果の要旨

提出論文：「ダバオ市におけるバジャウの都市経済適応過程
——経済的生活水準とエスニック・アイデンティティの観点から——」

提出者：青山 和佳

本論文は、少数民族の経済的な生活水準（standard of living）が変化するとき、エスニック・アイデンティティにどのような変容が生じるのかという問題について、フィリピンの一少数民族であるバジャウ（Badjao）を事例としてとりあげ、1997年8月から1999年12月までの長期間に行われた実態調査にもとづいて分析した実証研究である。その内容は以下の通りである。

序論となる第1章において、青山氏は、従来の開発経済学を、「選択の自由・権利という観点からの重要性にかかわらず、エスニシティ／民族変数は明示的に論じられてこなかった」と批判し、それを可能にする準拠枠の構築のために文化人類学に着目し、議論を発展させる。すなわち、青山氏は、エスニック・アイデンティティを、単に文化特性だけでなく、適応の過程で生じる様々な困難に対処するための能力の源泉たる資源でもあると捉え、貧困者を分析するための枠組みを提示する。本論文が有するオリジナリティの源泉は、この新しい視角にある。

第1部（ダバオ市のバジャウ）では、バジャウ（サマ）にかんする包括的な文献渉獵と実態調査にもとづき、ダバオ市におけるバジャウの社会経済条件をあきらかにしている。バジャウとは、サマ語族のうち漂泊性海洋民としての家船生活者を指すが、1960年代以降の研究によれば、その家船を居住場所とする生活様式は、第二次世界大戦後、島嶼東南アジアが新生国民国家となってからは近代化の波を受けて大きく変容した。近年のバジャウ（サマ）研究による限り、「貧しい先住民／少数民族」という焦点のあて方はまれであり、むしろ地域における商業資本主義の浸透や国境の登場に柔軟に対応してきたとする事例が報告されてきた。これに対して、青山氏は、フィリピンの場合には、都市貧困問題と直結しており、高い流動性ゆえに保護の対象になりにくいという固有性の性格を有すると指摘する（第2章）。これは、従来の研究にはない新しい発見である。さらに青山氏は、第3章において、バジャウが、客観指標からみて最貧状態にあり、居住地域における諸民族間の主観的評価においても蔑視されているという厳しい環境に置かれていると議論する。すなわち、スルー・サンボアンガ地域の内戦・治安悪化を背景に難民的性格をもってダバオ市に流入してきたバジャウは、セブアノ、タウスグ、マラナオ、ラミヌサなどの非バジャウ・グループとの比較において、学歴と労働市場参入に必要なスキルに乏しい。それゆえ、限られた生業（漁業、貝殻・真珠販売業、古着販売業、物乞い）に就かざるを得ない状況

にあり、所得・支出・負債、住居・耐久消費財などの生活水準諸指標のいずれもが、非バジャウのそれを下回っている。物質的な貧困は否定しがたい状況に存在するのである。また、実態調査による民族間の主観的イメージの把握によれば、非バジャウはクリスチャン、ムスリムの別なく、バジャウに対してネガティブで蔑視的なイメージを抱いていたという事実発見も論じられる。

これを受けて、第4章では、バジャウへの主観的意識調査によって、5つの生業グループが抽出され、バジャウ内の社会的不平等の議論が展開されている。すなわち、社会階梯の高い順に、1)男子：貝殻・真珠販売業（ホテル）、女子：主婦か非漁業、2)男子：貝殻・真珠販売業（ホテル・行商）、女子：古着行商業、3)男子：貝殻・真珠販売業（対貨物船・行商）、女子：主婦か古着行商業、4)男子：漁業（ボボ[魚伏籠]）・パラングレ[延縄]、女子：古着行商業・物乞い、5)男子：漁業（パナ[突き漁]）、女子：物乞い、というグループ構成の存在を指摘した。青山氏は、これらの生業グループは親族・地縁集団とも対応しており、彼らがダバオ市の都市経済に適応していく上でのひとつの単位と考えられるという重要な指摘を行っている。続く第5章においては、青山氏は、生業を男子型生業（漁業、貝殻・真珠販売業）、女子型生業（古着行商業、マット織り）、および女子・子ども・高齢者型生業（物乞い）の3つに仮設的に分類した上で、生業の概要、参入障壁および他のエスニック・グループとの関係という観点から、これらの生業のいずれもが地域経済における交渉面においてマージナリティを有することをあきらかにした。

本論文の中核をなす第2部（都市経済への適応過程とエスニック・アイデンティティ：5つの生業グループに関する比較分析）は、第6章から第8章までの3章から構成されるが、経済学と人類学の分析枠組みを縦横に駆使しつつオリジナルデータに議論を語らしめるといった手法をとっている。いずれの章も資料的価値だけをとっても極めて高いものがあり、同時に見事な実証分析となっている。すなわち、第1部における分析をふまえて抽出された、経済的な生活水準が異なる5つの生業グループについて代表的世帯をとりあげ、ダバオ市における都市経済への適応過程とエスニック・アイデンティティの現れ方について豊富な具体例を基礎に比較分析を行っている。

第6章では、5つの生業グループについて経済的行動の違いやその要因について「家計戦略」の概念枠組みを援用して分析を行ったのち、その分析において捨象せざるを得なかった、エスニック・アイデンティティの現れ方——サマとして自分自身や内部者に対する自己表現、バジャウとしての他人に対する自己表現——について、グループ間の比較分析を行い、つぎのような重要な結論を導いている。すなわち、「ダバオ市におけるバジャウの場合には、事例分析の結果が示すように、経済的な生活水準の向上は必ず文化変容をとらなうが、それは直ちにサマとしてのアイデンティティの喪失にはつながらない。むしろ経済力をつけることで自分たちらしさをどこに残すか自己選択できる余地が生まれる。他方、経済的な生活水準の向上がみられない、あるいは低下している場合の文化変容は、半ば強制的な同化、文化剥奪やアイデンティティの自虐的表現につながりやすい」というも

のである。さらに、第7章では、生業グループ別に、属性、一般的な生活水準、社会関係などについて記述分析を行い、1)経済的な生活水準（所得や消費など）の量的・質的把握と、2)その水準を満たすために実際にとられる行動過程の把握、および、3)家計の経済的実態が非経済的要素（宗教・社会儀礼など）を含む暮らし全体にどのような可能性、あるいは制約を与えているのかを把握しようとする。この作業の結果、5つのグループは析出地のちがいににかかわらず以前は漁業を生業としていたが、ダバオ市に転入してからはそれぞれに異なる生業転換を経験し、経済生活ばかりでなく暮らし全般に多様な適応状態を経験している様相があきらかになった。

最後に、第8章では各章の要約と結論を述べたうえで、次の如く分析結果の含意がまとめられている。すなわち、1)エスニック環境に配慮した介入の必要性、2)エスニック・グループ内部における不平等に配慮した介入の必要性、3)最低生活を維持するための所得獲得の必要性、4)政策介入においてサマの文化要素を配慮する必要性、5)政策介入における「文化の仲介者」の必要性である。さらに、青山氏は、フィリピンにおける先住民政策／研究に関する一般的含意として、1)適応のヴァリエーションを生むひとつの要因として「介入」を考慮した研究の必要性、2)マイノリティの多様性と自治権付与では解決しないもうひとつのミンダナオ問題、3)多文化主義政策への適応にみる注意点も併せて指摘している。

以上のように、本論文は、極めて斬新な内容を有するオリジナリティに溢れる研究であり、その学術上の意義は以下の如く数えられるであろう。まず、第一に、従来、その必要性が認識されながらも、開発経済学が分析対象として捨象してきた少数民族のエスニック・アイデンティティを陽表的に福祉指標として取り入れ、社会行動についての積極的な分析を行なう基礎的枠組みを提示することによって、開発経済学の分野に多大な貢献をしている点である。アマルチュア・センは、GNP至上主義に陥っている福祉指標を批判し、潜在能力アプローチを提唱したが、その後の議論の多くは抽象的な段階を脱し得ず、具体的な個別事例の中で、このアプローチを活用した議論はほとんどない。青山氏は、開発経済学のみならず文化人類学に及ぶ膨大な文献渉猟を行い、長期に渡る実態調査によって、従来の問題点を果敢に克服しようとし、説得的な議論を展開している。この意味で、本論文は、経済学と文化人類学を横断する準拠枠を構築することによって、潜在能力アプローチを発展させる新しい視角を提示していると評価できる。

第二に、フィリピンにおいても研究が遅れ、その詳細があきらかではなかった少数民族バジャウの社会経済状況の実態について、数多くの興味深い事実発見を行っている点において、開発経済学におけるエスニシティの導入という観点のみならず、文化人類学や地域研究におけるパイオニア・ワークとして大きな貢献をなしたと考えられる点である。サマ族にかんする研究は国際的学会が存在するまで発展してきたが、これまでの研究は、専ら海洋漂泊民である海サマに限られ、いわゆる陸サマについての研究は皆無に近い状態であった。英語に翻訳されれば、本論文は、陸サマにかんする先駆的文献としてのパイオニア

・ワークになることは間違いないところである。補論として添付されている月例家計調査に関する様々なデータ類も、今後のサマ族研究において、きわめて有益な資料として活用されていくであろう。

最後に、青山氏は、ダバオ市一般で話されているセブアノ語に加えて、バジャウが用いているサマ語を修得し、万全な準備の下でインタビュー・質問票調査を実施し、きわめて精度の高い一次資料を収集している点を再度強調しておくべきであろう。従来の貧困層のジャーナリスティックな分析とは一線を画す研究であることはいうまでもなく、調査方法だけをとっても、青山氏の独立した地域研究者としての優れた資質を伺わせるに十分である。

しかし、本論文にも問題がないわけではない。まず、第一に、本論文の中心概念である「エスニック・アイデンティティ」という術語の利用にあって、叙述にミスリーディングと思われる箇所が散見されることである。青山氏の「エスニック・アイデンティティ」は、関係論的同定と実態論的同定という二重性を有する。冒頭の定義ではこの点は明瞭であるが、個々の分析にあっては、この二重性が必ずしも明確に意識されているわけではない。とくに、経済的生活水準の指標、階層性と社会的流動性の存在、あるいは教育機会の拡大などの諸項目とエスニック・アイデンティティとの関係についての論述が不明瞭になっている感がある。さらに、青山氏の問題関心は、アイデンティティを複数の側面で自由に維持・管理できるという機能 (function) の有無に帰着するのであるが、それは、究極的には、政治環境や社会制度などのより外生的な要因に依存していると言わざるを得ないのではないだろうか。この点についての分析が不十分であるとの感は否めない。

第二に、本論文の陰には膨大なデータが存在しているはずだが、それが十分に活用され尽くされているとは思われない。たとえば、所得決定因についての説明変数については、より詳しい説明が必要であり、そのためのデータも十分に収集されているはずである。バジャウの社会的不平等を論じた第4章の分析においては、主観的格差と客観的格差の対応関係についての分析も、もっと掘り下げられるべきであったように思われる。さらに、各エスニック・グループの価格やリスクに対する反応性の分析もバジャウの経済行動をより詳細に捉えるためには必要であろうし、所得や資産とエスニック・アイデンティティの関係についての、より積極的かつ大胆な計量分析が試みられるべきであっただろう。

第三に、バジャウが貧困から脱するためには「社会保障」が必要であるという観点から結論部分で論じられている提言はやや平板であり、より掘り下げられるべきであったのではないかと言うことである。青山氏が重要性を指摘している、より高次の行政機関、NGO、開発援助機関などの介入のモデル事例について、より具体的な説明があっても良かったように思われる。もっとも、そのためには、「自立的発展」の定義という大きな問題が存在しているのは事実であり、この点については、青山氏の今後の長期の研究発展に期待したい。

このように本論文にも幾つかの問題点が認められるものの、それは本論文が有するオリジナリティとクオリティの高さをいささかも損なうものではない。以上の経緯から、この審査委員会は、全員一致で、本論文が本研究科の要求する博士論文としての基準を十分に満たしており、青山和佳氏が博士（経済学）の学位を授与されるにふさわしいと判断するに至った。

2002年9月29日

中西 徹 (主査)
中兼 和津次
竹野内 真樹
佐口 和郎
柳 澤 悠